

---

# よちよち赤ちゃん大冒険

両角忘夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よちよち赤ちゃん大冒険

### 【Nコード】

N1671A

### 【作者名】

両角忘夜

### 【あらすじ】

あたし赤ちゃん。名前はチチカ。ある日突然いなくなったママを捜しに、変な奴らと旅に出たのです。

## 第一話 仲間たち

唇才バカという珍奇な怪獣が、先月から上野動物園の猿山を占拠し、悪さをしているらしい。

「あなた。そんな話すると、チチカちゃん信じちゃうでしょ」

「いいんだ、この子は。不思議系タレントか、アバンギャルドな小説家に育てるんだから」

「私は反対ですッ」

パパとママが争っている。あたしが産まれたときからずっと、喧嘩の繰り返しだった。夫婦ってヤだな。グレてやることに決めた。

はい、ここで自己紹介。あたしは赤ちゃん。名前はチチカ。趣味はまだない。

こんなふうには主人公が自己紹介する話はイケてない気がするが、話し手があたしだから大目に見てほしい。

さて、ある晴れた平日のことだった。あたしは、気持ちのいい午後のまどろみから目覚める。お父さんは会社へ、お母さんはどこかに出掛けたいらしい。どこかって……どこへ？ ママ、どこ行っちゃったのオ。

15年後にグレル計画で準備をしていたあたしよりも先に、ママが家出を決行したというのか。連日の夫婦喧嘩に疲れたのが原因か。心細いあたし。

このままママがいなくなったら、本当に変なタレントか小説家にされちゃう。そんなのヤダ。あたしはママを捜しに出る決心をした。しかし、あたしはまだ二足歩行もままならぬ、恥ずかしながらハイハイだ。ハイハイの行動範囲は限られている。

アーンアーン。あたしは大声で泣いた。いつも泣けばママが飛んできた。あたしの泣き声を聞いて、帰宅せよ、ママッ。

ところがやってきたのは、近所のサイケデリックな少年、ミチ太郎、6歳。

「よちよち。あんまり大声で泣いてると、誘拐犯がさらに来ちゃいますよオ」。不吉なことを言う。

それからミチ太郎は、玄関に駐車してある乳母車にあたしを乗せ、外に連れ出した。母親捜しに協力してくれる気か。それとも、こいつが誘拐犯なのか。

家を出ると、世間には危険がいっぱいだ。片道三車線の国道、落ちたら助からない用水路、飛び込み自殺があつたという踏み切り、不良のたまり場であるゲームセンター等。そこに0歳のあたしと、6歳のミチ太郎が行く。

「おー、これこれ」。コンビニの前で、太った三毛猫に呼び止められた。

「なんですか。あたしはチチカ、まだ赤ちゃん。ママを捜しに旅に出てるの」

「それは立派な心掛け。しかしおぬしら、何だか危なくて見ておれん。それで呼び止めた次第じゃが」

「子供だから、危ないに決まってるよオ」。脳の小さいミチ太郎が言い返す。

「よければ、拙者がお供つかまつるがどうじゃ。ただし条件がある」  
「条件ってなんですか」

「母上が無事見つかったら、拙者をそなたの飼い猫にさせていただきます」

「いいですよ」

「有り難き幸せ。拙者これでも、猫ながら武士。鋭き爪で、チチカ殿の敵をばつさり斬り捨てるでござる」

こうして二人と一匹の、母捜しの旅が始まった。

一行は、買い物客で賑わう夕方の商店街に出た。

「チチカ殿の母上は、案外このような場所に、食料を買い求めに来ておるかもしれん」

「あ、あれ何だ」。ミチ太郎が声をあげた。

買い物客を掻き分けて、五人の荒くれ者たちが歩いてくる。その

後ろに一匹の熊。イタリアンマフィアのようなスーツでキメているが、今にもはち切れそうだ。

「あの熊が親分ってわけ？」

「……これはいくら猫目一刀流を極めた拙者でも、正攻法ではかなわん。とにかく、一時避難じゃ」

あたしたちは急いで、近くにあった喫茶店に避難した。アイスマルクを三人分オーダーする。ところが、続いて、熊と荒くれ者たちも入店した。異様な緊張感が漲る。

すぐ近くのテーブルを二つ占拠し、一人が大声で店長を呼ぶ。「とりあえず、何かツマミと、キンキンに冷えたビールを持ってこいッ。それから女も人数分用意しろや」

「あいにくではございますが、当店はキャバクラではございませんので」

「んだア。客にイチャモンつける気が、てめえエ」

「まあ、やめい」。手下の暴走を、熊親分が抑える。「悪かったのオ。日頃、取った取られたで体を張つとる奴らじゃけん。ついカタギの皆さんにも強がった口を利きよる」

「親分、すみませんでしたーッ」。チンピラが起立し、直角に頭を下げた。

「まあ、ええ。見苦しいから座れや。……オヤジさん、とりあえず何でもいいから、出来る料理を持ってきてくれ」

「は、はい」。店長は安堵した顔で引き下がった。しかしチンピラは納まらない。

「親分に恥かかせました。ここで指をつめるっす」

「やめいと言つとるじゃろうが！」

仲間も立ち上がり、男を座らせようとする。すごい迫力。ヤクザ映画さながらだ。

そのときだった。アイスマルクを飲み終えたミチ太郎が無邪気に言った。「すごいすごい。熊も喋るんだなア」

「んだ、コラ。もう一度言ってみろー！」。顔色を変えた男たちが

一斉に振り向き、あたしたちのテーブルを取り囲んだ。

「馬鹿ね、あんた。猫だつて喋るじゃない」

ところが肝心の三毛猫は、ゴロニヤンと鳴いて普通の猫のフリをしている。

「ごめんなさい。あたしはチチカ、まだ赤ちゃん。この子はミチ太郎、まだ6歳なの。はつきり言つて、あたしたちは未熟です」。そう言つて、あたしは必死で許しを求めた。

「ざけんな。謝つて済むんなら警察も念書もいらんわ」

「まてまて」。また熊親分が男たちを止めた。

「小僧、名をミチ太郎と言つたな」

「そうだよオ」

「今どき、実に勇氣ある子供とは思わんか。お前ら」

「はっ。しかし……」

「小僧、教えてやろう。普通そこらへんの大人はな、わしが恐くて、熊などと本当のことを言わんのじゃ。それに比べてお前は、肝が座つとる。あっぱれじゃ」

あたしは呆氣にとられて、ポカンとしていた。

「それにお前、そんなことを言つたのは、こいつが指をつめると言つたのを止めたかつたからだろう」

「だから違つよオ」。ミチ太郎は無邪気に否定したが。

「さすがじゃ。すべてを自分で背負う覺悟じゃな」

「お前……、俺を助けてくれたんかあ」

「だから違つつてばア」

「うつつ……」。チンピラが膝をつき号泣した。

「もうええ、もうええ」

そこにタイミングよく、テンコ盛りの料理が運ばれてきた。喫茶店なのに、刺身や焼鳥も並ぶ。

「まあ、盛大にやつてくれ。その猫くんも遠慮せず。さあさあ」

## 第二話 感動

妙な誤解のお陰で、あたしたちはご馳走にありつけた。

ところであたしは、ママのことを思い出していた。

「浮かぬ顔をしているが」。熊親分が訊ねる。

「実はあたし、お母さんを捜している途中なの。歳は25で、ぼっちゃり美人で、趣味は音楽鑑賞、少女時代はビジュアルバンドの追っ掛けもやってたらしい。けど、どこ行っちゃったのかわかんない。寂しいよお」

「うむ、それは大変。ノンキに宴会などしとる場合じゃないの。子分らにも手配させて捜させよう」

「ネエさん。何か失踪の手掛かりみたいなものはねえですか」

「そういえば数日前の夫婦喧嘩で、パパが、上野動物園に唇オバカって怪獣がいるとか、そんな話をしていたわ」

「するってえと、ネエさんのママさんは、上野に行った可能性が濃厚だと」

「うむ。動物園なら同じ動物同士、顔が利く強みがあるわい」。熊親分は胸を張った。

「しかし相手が、唇オバカという怪物となると手ごわいでっせ」

「馬鹿もん！ わしを誰じゃと思うとるんじゃ」。熊親分は牙を剥き、獠猛に吠えた。

「拙者も微力ながら力を貸すでござる」。三毛猫も今頃になって言う。

「よし決まった。野郎ども、すぐに武器をかき集める。上野動物園に向かう！」

そういうことで、あたしたちはヤバイ武器を満載したトラック二台に分乗し、上野動物園に向かった。

日が落ちて、動物園の門は閉まっていたが、トラックは正面から体当たりし、門をこじ開けてなだれ込んだ。

話をはしよる。結果的にそこには、唇オバカもママもいず、あたしたちは器物損壊と不法侵入、銃刀法違反の現行犯で逮捕された。主犯格であるあたしとミチ太郎は、未成年であることから嚴重注意で済まされたが、熊親分とその子分、三毛猫侍はどうされるかわからない。

ママが泣きながら、「こんなことになったのは私が、チチカちゃんを置いてネットカフェに行ってたせいよ」と言い、パパも、「俺の方こそ、唇オバカなんて嘘ついたからこんなことになったんだ」と懺悔した。

でも安心して下さい。最後はハッピーエンドが待っていました。まずマスコミが今回の事件を、赤ちゃんを助けた動物たちという美談で取り上げた。すると、世界中で大反響となった。動物愛護や児童福祉の各団体が共同でキャンペーンを張り、減刑を求める署名活動も行われた。

あたしもミチ太郎も、連日ラジオやテレビに出演し、熊親分たちの無罪を訴えた。

さらに、あたしたちの活動を支援してくれる弁護士グループが動き、上野動物園と協議した結果、「今事件に関し、被害を訴えるつもりはない」との覚書をいただけた。

無罪放免となった熊親分たちと再会し、あたしは涙が出るほど嬉しかった。

「ありがとう」

「ありがとう」

わたしたちは例の喫茶店で、お互いの無事を祝った。そこであたしは感動のあまり、ハイハイから二足立ちになっていた。

「うむ。あっぱれじゃ」

そこにはもはや、人間の赤ちゃんだの、動物だの、荒くれだのといった境界はない。一つになれた瞬間があった。

三毛猫は約束通り飼い猫になった。毎日、カルカンをうまそうに食べている。



もうパパはあたしを、不思議系タレントやアバンギャルドな小説家にしたとは言わない。だってあたしは、度重なる報道番組の出演で有名になり、プロダクションからスカウトされ、新時代の赤ちゃんアイドルとしてデビューを果たしたのだから。

この喜びを全世界の子供たちと動物に伝えたい。  
愛をこめて。

チチカでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1671a/>

---

よちよち赤ちゃん大冒険

2010年10月8日15時27分発行